

教養教育の授業改善を巡って  
— 公開実験授業の経験から —

京都大学

高等教育教授システム開発センター

教授 田中 毎 実

① FDについての印象

私はあちこちのFD講演会などで喋るチャンスがあるのですが、面白いことに、どこのセミナーもそれぞれに特徴があります。拝見したところ、新潟大学の特徴は、三つあります。一つは、参加者が多いこと。こんなに多いのは、珍しいですね。二つは、内容が単一のテーマに限定されていないこと。制度的な話から始まり、理念の話、学生の話、自分たち教師の話と、どんどん議論が広がっていますね。多くのセミナーはもっと単色で、幅の狭い部分にしばって議論をしています。三つは、センターが積極的であること。センターが前面に出て、こんなに喋っているのは初めてみました。

私たちの京都大学では、総長特別経費で、一般教育についてのセミナーを実施しています。最初の2年間は、比叡山ホテルで、担当教員が200人程参加して実施しました。京都大学では、総合人間学部が責任部局として一般教育を担当しています。現在の体制では、たとえば語学の先生方などは、かなり強い被害者意識をもたれていて、「あれこれと要求だけはたくさん言われるが、それに応ずる大学の体制がない」とおっしゃりたいわけです。しかし話す場所がない。この比叡山セミナーの機会に発言ができ、皆さんも聴いてくれる。また、一般教育科目がどうなっているのかについても、初めて全学の担当者同士で意見交換ができる。もっと言えば、普段、他の学部の先生とまと

もに話すことはあまりないので、公式行事はイブニングセッションを含めて夜の9時過ぎまでなのですが、その後も深夜の2時3時まで小グループに分かれて非公式に飲みながら意見交換が行われました。大学へ帰る時には、皆さん明るい雰囲気、「来て良かった」と言われます。

また、山口大学では、少年自然の家を利用して同じようなセミナーを実施されていますが、これをもって感じの良い会でした。

合宿というかたちをとられないまでも、まずは、こういう形で集まることが、第一歩だと思います。それをやらなければどうしようもない。そんな感じが、強くあります。強制されようが何だろうが、まず集まってみる。こんなふうにはまず始めるのは、とても良いことだと思います。

② なぜ大学教育のフィールド・ワークをめざしたか

全国には大学教育と銘打つセンターがたくさんありますが、そのなかで京大のセンターの特徴は、日常的な授業をフィールドにして、授業や教授法についてのミクロレベルの研究をやるというところにあります。他のセンターでは、もっぱらマクロレベルの制度論的研究が行われています。スタッフも、教育社会学や比較教育学や行政学の出身者であって、かれらはとても大きな話をしておられます。たとえば、アメリカの大学制度がこうな

っているから、日本もこうすべきだといった議論をされる先生がたが、集まっておられるわけです。それでは困ると思ひまして、京都大学では、なるべく具体的なフィールドに腰を据えて考えているとしているわけです。これは随分しんどいのですが、趣旨は間違っていないと思っています。私自身がこのような大学教育のフィールドワークをやろうと考えた理由は、二つあります。

私は、前任校愛媛大学で長い間教育学部に在職していました。専門が教育学でしたので、教育の勉強は、随分したつもりでいたのです。ところが、愛媛県にいる間に、ショッキングなことが幾つかありました。

一つは、臨床心理関係の症例研究会を10年以上継続して開いていた関係で、愛媛にいた最後の数年ほど、県教育委員会から委嘱されて、荒れが少し収まった状態の学校を廻りました。その学校の教員集団の研修会で、助言したのです。あちこちに何度も行ったのですが、ショックだったことがいくつかあります。たとえば、都市近郊の国道沿いにある中学校で、夜になると3年の女子生徒たちが、国道に集まってくる若い男性たちの車に乗り、彼らの家に泊まりにゆきます。朝になって、彼らが職場に出勤してしまうと行き場がなくなり、彼女たちは仕方なく、昼頃学校にきます。先生方は放置しておくことはできませんから、何とか教室に座らせるように、彼女たちを追っかけるわけです。このような生徒に対して、他にどう指導したら良いのか。助言して欲しいといわれて、私は、ただ絶句するほかなかった。口当たりの良いことや、その場しのぎのことなら、何かしゃべれたかもしれない。しかしそれはできなかつた。彼女たちの居場所は、もはや学校にはないのだから、教師集団は、ただひたすら追いかけるという徒労を繰り返すほかはないのです。私は、疲労しきっている教師集団を前にして、何も言えずに、ただ絶句するしかなかつた。これらの研修会で繰り返したしたのは、実地の現場、臨床の場面に立った時、私は、何もまともなことがしゃべれないということでした。ひるがえって言って、私は現場をもっ

ていないかといえば、そうではない。私は、大学で、毎日毎日授業をしている。20年から30年間も、教員をしている。ここから出発すれば、つまりこの現場では、自分のこととして語ることができる。そう考えたのです。

もう一つは、臨床心理の人と二人で、ロジャースがはじめたエンカウンターグループをやりました。私は、読書による予備知識はあったにせよ、ほとんど訓練されてはいませんでした。そのくせ、いきなりコ・ファシリテーターとして参加したのです。それ以来、もうやめようと決断をするまでの10年間ほど、続けました。その時にとてもびっくりしたことがいくつかあります。そのうちのひとつが、私には「聞く力」がひどく貧しいということの発見でした。私は、教師だから、喋る能力は幾らでもあります。2時間喋れと言われれば、2時間でも。それが3時間でも4時間でも、いくらでも喋ることはできる。ところが、私にひどく無い能力は、聞く能力です。いくらでも喋れるが、一つも聞けない。ちゃんと話を聞こうとすると、ものすごく苦痛なのです。エンカウンター体験では、このことを思い知らされました。聞く能力はほとんどないのに、喋る能力ばかりあると。こんな教師が本当に授業ができていいのか。聞くこともできない教師が、授業を双方向に組み立てることなどできるわけがないのです。これも、とてもショックなことでした。

私は、愛媛大学では、ずいぶんきつい教師で有名でした。たくさんを、落としました。必修科目では、毎年面白がって、この課程は何%落とした、この課程は何%落としたと、表を作ったりして、喜んでいたので。ひどい教師ですね。平均的に見ると必修科目で15%くらい落としていて、教員採用試験に受かっていた学生が、私の科目で卒業できないということもありました。そんなことをして、私はそもそも、学生とのインターアクションという仕方で、授業を組み立てられていたのだろうか。そのように、強く疑問に感じてきました。なにしろ私には聞く能力がない。ただ喋るばかりなのだから。

ちょうどその頃からじょじょに、大学の教授法とか教育方法とかが大きな問題になり、私は、京大のセンターに赴任しました。その際、私は、自分の基本的な出発点を、〈私の至らなさ〉に置こうと考えました。小学校の授業研究会などでは、ゲストで招かれた大学の先生は、だいたい最後に「こうしたら良いではないか」などとアドバイスをするように、仕向けられます。私は、もうこんなことはやるまいと、考えました。まず自分の授業がなっていないということを出発点として、大学の授業を考えていこうとおもっていたのです。これは今にして思えば、まことに正しいやり方でした。

大学の教育を考えた場合、小学校・中学校とは違って、誰も上から「こうすべきだ」などとは言えないのです。その一番大きな理由は、大学の教員が、中小企業の経営者であることです。小学校・中学校・高校の教師の場合には、学習指導要領などによって、教える内容については大きな規制があります。彼らの決定権は、大きく制約されているのです。彼らに残されていることといえば、あらかじめ決められていることを、どうすればきちんと教えることができるのか、何がもっとも効率的か、ということを考えることなのです。たしかにこの種の技術的な問いには、「正しい答え」がありそうですね。しかし、大学の教員はそうではありません。何を教えるか自分で考え、内容も、やり方も、手順も、すべて自己決定しなければいけません。みんな自立的な中小企業の経営者なんです。このような人たちに頭ごなしに「こうした方が良い」などとは言えない。せいぜいできることといえば、「私はこうしているが、あなたはどうか」という、同じ次元に立った議論ぐらいでしょう。

今日の講演の演題は、「教養の授業の改善について」です。けれども、当然のことですが、私が一方的に何かのノウハウをもっていて、それをお話するなどとは、思わないでください。そうではなくて、私はこれだけでたらめなことをして、苦しんでいる。あるいはそちらもそうかもしれな

い。一緒に考えましょう。そういったことなのです。

### ③ 京都大学の一般教育の現状

もう一つお話をしておきたいのは、京都大学の現状です。京都大学の教養教育については、さんざんお聞きでしょう。私は残念ながら紛争世代であり、出身校では、ほとんどともに教養の授業を受けていない。そればかりか、そもそも4年間で2か月半くらいしか授業に出ていません。なぜ卒業できたのか、いまだに不思議です。きちんと教養教育を受けていないので、良く分からないところがあるのですが、京大に赴任してまずびっくりしたことは、受講者数です。

毎年毎年データがあるのですが、受講登録者が多い科目では、2000人を越えています。教室はどうかというと、一番大きな教室で450人収容できる部屋が一つあるだけです。それでは、どういう受講者数の変化があるのか。全学カリキュラム委員会に委託されて事務が調べた結果があります。さすがに、450人の部屋で2000人ですと、最初の頃は、座席に座れなくて溢れているそうです。その後どうなるかということ、だいたい4月の終わりには、座れない学生はいなくなる。6月になるとガラガラになる。最終的に試験をする時になると、また学生がダラッと出てくる。なにか凄いことですね。

「自由の学風」が、京都大学の学風です。これが全部が全部ダメだとは、けっして思っていない。いいところも、たくさんある。しかしこれまでは、教育については、学生の高い能力に大きくおんぶして、何とかやってきたところがある。学生の力だけに限らず、キャンパス全体のもつ伝統的なさまざまな教育力におんぶして、いままで何とかかんとかやってこれた。それが、急速に当てにできなくなっている。これが、現状なのです。

### ④ 学内調査が示してくれた事実

私たちは、かなり大規模な学内教育意識調査を、何回かやりました。そのうちの 하나가、卒業生調査です。ここ40年くらいの卒業生を対象に、京都大学の教育についてどう考えているのか、調査したのです。かなり高い回収率です。もう一つは、4回生調査です。これも50%弱の回収率です。この二つで、学生の意識がかなりわかります。

これらの調査で何が見えたかと言いますと、ものすごい勢いで教育の満足度が減っているということです。かつての卒業生は、40年以上過ぎて60歳を越えていますから、ある意味で大学時代の思い出は、すっかり「良き思い出」になっています。そういった人たちが、京都大学の教育は「良かった」と評価するのは、ある意味で当然のことです。卒業年度が近くになればなるほど、評価がシビアになる。それはそうでしょう。それにしても、実際に見ると、あまりにも大きな変化です。

たとえば、工学部では、「工学部の教育に満足している」が、以前は80%~90%くらいあったのが、最近の卒業生では、急速に10%台まで下がっている。医学部ではダウンと下がってある水準まで落ちて、その低い水準のまま来て、最近では少し持ち直す傾向が見える。ずいぶんひどいのは、医学部と工学部ですね。一般的に言って、教育満足度は、落ちてきている。ところが、「それでは、あなたは、京都大学に入って良かったか」と聞くと、圧倒的にプラス評価なんです。結局、ここで何が起きているかというところ、彼らには、中身ではなくて、ラベルだけが大切なんだろうね。中身は一つも満足していないが、ラベルだけは良かった。そう言っているんだろうと思います。ただ、ものすごく強い勢いで、しかも急速に、学生の不満層が増えている。もはや正常な教育運営ができる限界点が超えられたのかもしれない。だからこそ、医・工学部の先生方は危機意識が強い。工学部の先生の話の聞くと、「<これはいい学生だ>という人数は、昔も今も変わらないが、学生の定員があまりにも大きく増えてたので、駄目な学生が増えた。」そのように解釈されます。正しいかどうかわかりませんが、切迫した危機意

識だけは、共有されているようです。これは、私たちの実施した京大教官の教育意識調査からも明らかです。

私たちのセンターは、全学施設なのですが、とくに医学部と工学部の支持が大きな支えになっています。この支持の理由は、ここにあるのだと思います。

#### ⑤ 「マンガ」という当初評価から「ノリ分析」まで

すでにお話したとおり、京大は、特定の科目では、2000人もの学生に対して、単位を与えている。こんな大学に、大学教育や教授法について考えるセンターができたわけです。センター設立の時、「マンガだ」という声が聞こえてきました。私も、最初はそうだろうと思っていました。しかしこの頃は、「まんざらマンガでもないか」という気もしてきています。大学の風潮も、じょじょに変わってきました。たとえば、私たちの公開実験授業でも、内部からの参観者が、ほんのわずかですが、それでもじょじょに増えているのです。

私たちの公開実験授業は、楽友会館講演室で実施していて、授業後その隣の部屋で参観者たちとの授業検討会をやっています。授業と検討会の様子は、ビデオカメラで撮っています。今年で3年目ですが、来年からは、私一人が授業するのではなく、リレー式で授業したり、慶応大学との連携ゼミをやったりしたいと考えています。1年目は、30人の学生が聴講し、15人が最後まで受講しました。2年目は、100人の学生が聴講し、70人が残りました。3年目は、300人の学生が聴講を希望し、70人に制限し、50人が残りました。このプロジェクトに、センターのスタッフは、研修員まで含めて、全員参加しています。参観者も段々増えて、センタースタッフを含めて常時12~3人が参観しています。京都大学内部からの参観者が相対的に見てまだまだ少ないのが、やはり大きな問題点なのですが。

公開実験授業は、双方向性を生かした授業実践

の場であり、さまざまの実証研究や生態学的研究のフィールドであり、授業者と参観者たちとの相互研修の場でもあります。授業を公開して、授業研究をして、FDもやる。私たちは、こんな風に、いろんな意図を込めているのです。

このうちの、授業研究について話しましょう。たとえば、学生の授業評価については、これまでにこんな報告があります。毎時間学生の授業評価をとり続けると、評価得点に「中だるみ」がある。最初はますます高く、途中でグーッと評価が下がり、最後にまた持ち直す。こういう報告があるのです。それがほんとうかどうか、調べました。結果として、そんなにクリアーに評価の波はでません。ただ、授業評価に波があることは、たしかです。典型的な波はどういうものかという、一番最初の授業評価では、否定的な意見がずいぶん出てくる。自由記述欄には、全体的に悪いとか、なってないとか、こちらの方が応えようのない記述、具体性のない記述しかない。そこで、具体的に改善できるような意見を書くように指導し、その意見に応じていくと、じょじょに授業評価が変わっていきます。さらに授業が進行していくと、前半の授業が終わる頃に、授業評価が下がる現象があります。これは、面識のない授業者と受講生の間で相互行為の仕方についてまず「間合いを計る」段階があるのですが、間合いが定まり一定の相互行為のやり方が定まって、それを土台として相互行為が展開される次のステージへ入ったことを、示しているように思われます。

このことを一般化して言えば、次のように言えます。学生たちの授業評価や感想などを丹念に調べてみると、学生と授業者との相互行為が、遭遇、探索、確立といった段階を経てじょじょに組織化されるということです。

このような長期的な調査ばかりではなく、短期的な調査もしました。たとえば、一時間の授業のなかで、授業者の感じる「ノリの良さ」「悪さ」の変動と、授業の内容と展開、学生の顔挙げ行動との間に、相関があるかどうか。これについて、授業者の授業後のインタビューや、ビデオ分析な

どによって、調べました。この相互行為分析を、私たちは、「ノリの分析」と呼んでいます。あれこれ手間のかかる調査を繰り返したのですが、あきらかに教師のノリと授業内容と顔挙げ行動との間には、相関がある。このことから、いくつかの実践的な意味を引き出すことができます。たとえば、授業者は授業で、良い循環と悪循環に直面します。たとえば、教師がのっている時には、彼はつい、同じようにのっている学生を見がちだ、そうするとますますノリは良くなる。逆に、教師のノリが悪い時には、彼には不安がありますから、ついあまりのっていない学生を見がちで、ますます意気阻喪します。典型的な悪循環に陥るわけです。

ところで、学生の授業評価は信頼できるのでしょうか。彼らに潜在的な評価能力があることはたしかでしょう。しかしそれは、潜在力でしかありません。彼らに実際に評価させ、その評価を授業の実際の組み立てのなかできちんと受け止め、こちらが答えようのない評価に対してはその旨を伝える。こうして、彼らの評価する力を鍛えあげなければなりません。評価能力を鍛えるためには、日常の授業の中で教員が学生の要望にキチッと応え彼らに要求を出すことを続けるほかはありません。

それでは、授業の中で学生をアクティブにするにはどうしたら良いのか。それもまた、教員が働きかけて、学生が応えてきたらこれにしっかりと返す。このようなやりとりの地道な努力の積み重ねしかない。そんな気がします。私は、このやりとりのために、学生に毎回「感想・意見・反論／何でも帳」を書かせ、これにコメントを返しています。この目的は、いくつかあります。これは、やわらかい出席強制であり、これを書くためにある程度能動的に授業に参加しなければなりません。さらに、授業の後、その授業について考える時間を与えることになります。しかし、通年授業では徐々に、すごくいいコメントを書ける学生とそうでない学生に二極化する傾向があり、この分解をうまく克服することはできませんでした。残念

です。

#### ⑥ 相互研修としての授業検討会

授業後の授業検討会については、資料をご覧ください。私の専門とは異なる専門の先生方、他学問分野の先生がた、とくに理科系の先生がたが、いかに凄い発言や問題提起をされているか。これをご覧ください。これまで大学を超えた、あるいは学部を超えた参観授業はほとんどされていません。実際、自分の専門と違う授業を参観して何の役に立つのか、という疑問をもたれる方がありません。そのためにこの資料を配付しました。学生や専攻が違っていても、高等教育の現場というフィールドの共通性があれば、相互研修には意味があります。

たとえば、ある時、小学校の教員を退職された人が検討会に参加されて、「学生に対して〈遅刻をするな〉〈前に出て来い〉とどうして言えないのか」と言われました。おそらくここには、「文化」のちがいがありそうです。たとえば、大学生なのだから、大人として扱うといった「文化」です。その種の「文化」を共有していない人とは、話をしてもとても辛い。そんなことがあります。もう一つ。定年をすぎた人は、自分の実践のフィールドをもっておられません。たとえどんなひどい発言をしても、自分のフィールドに帰って、実際にそんなことができるのかと自ら問われるという状況には、けっしてならない。その意味では、無責任なのです。逆にいうと、大学というフィールドと文化を共有していると、かなり充実した話ができるのです。私が考えますのに、大学の授業には、伝達型、練習型、思考型、創造型の四つの類型があります。私の授業は典型的な思考型ですが、暗記やドリルをさけることのできない理科系の伝達型、練習型の授業者ともうまく話が合うということです。

先日、あと一年あまりで京大を定年退官される工学部の先生に、センターの公開研究会で、発表をしていただきました。この先生によれば、大学

院・学部教育のほかに一般教育の基礎科目も担当されており、基礎科目については、他の先生から「あんたがちゃんと授業をしないから専門で困る」と批判を受けているそうです。受講登録者100人程度の講義ですが、出席を取らなかつたらすぐに15～16人になって、さらに「これだけはきちんとしなければ」と考えて少し厳しくしたら、たちまち出席者がなくなる。こんな状況をもう何年も繰り返してきたという話でした。ところが、その教授の出席された工学部のFD研究会では、講師が「学生のことを無視した授業をしては駄目なんだ。学生のことを良く見て、学生が楽しいと思う授業をすべきだ」と主張されたそうなんです。この工学部の先生は、この講師の主張を問題にされて、私たちの公開研究会では「楽しい授業でいいのか」というテーマで議論されました。

伝達型の授業では、これだけは伝える必要があるという内容があります。そうすれば、どうしても、強制という色彩を帯びざるをえません。その時に、その強制をどう堪えさせ、むしろ積極的に引き受けさせてゆけるのか。これは、本当に大問題です。残念ながら文科系の私たちには、どうしてもこれだけは伝えなければ専門へ行けないという「内容」は、あまりクリアーには見えません。だから、理科系の先生たちと一緒に考えて考えることは、たしかに難しいのです。

それでも、私たちの思考型の研究授業に参加してくれる理科系の先生は、検討会でとてもうまく、しかも深くコミットしてくれています。彼らは、ほとんど伝達型・練習型の授業をしているわけですが、それでも私たちの授業にコミットできる。なぜでしょうか。それは単純明快です。伝達型であろうが、練習型であろうが、学生がアクティブにならないと授業にはならない。それを「楽しく」と言うかどうかは別問題ですが、何とか向こうをアクティブにするやりかたこそが、問題なのです。私の実験授業では、インタラクションをやろうとしている。評価についても、向こうが働きかけたらそれを返していくという、インタラクションをしている。そのなかで起きる問題について、議論

している。だからこそ彼らは、深く乗ってくれているわけです。

繰り返して言いますが、伝達型であろうと練習型であろうと、一番基本的なところでは、相手をいかにアクティブにするかという問題がある。その点では、少しも変わらない。むしろ、伝達型や練習型の授業の担い手から見ると、思索型の授業で、いまここにどういう問題が起こっているか、とても良く見える。この点では、小学校や中学校の先生と一緒に研究会をやるのでは、たしかにあまり意味が無いかもしれません。しかし、同じ様な大学教員集団の枠のなかでFDをキチッとやれば、これにはかなり意味がありそうです。高等教育の教員集団のなかでは、お互いの授業の種別や学校の状態がずいぶん遠ければ遠い程、むしろ意味があるのではないかと思います。であるからこそ、この3年間やって虚しかったことの一つは、これが私の独演であったことです。本来連携が可能であるはずのプロジェクトで、自分だけが見せ続けるのは、たしかに、しんどく虚しいことです。これについては、来年以降、リレー式公開実験授業をくむことによって、改善する予定です。

#### ⑦ 大学よ連携せよ

さて、これまで京都大学の悪口ばかり言っていたので、良いところも言いたいと思います。たとえば、京都大学では、私たちが公開実験授業をやると言った時、誰からも一つもクレームなどは付かなかった。むしろ、難しい局面のあちこちで、事務部門も含めて、さまざまな支援体制を組んでくれて、私たちは、とても助かったのです。同じことを他の大学の私の同僚がやろうとしたら、公開実験授業で参観している人について、「聴講しているとすれば、聴講料は」などと言われたそうです。そういうなかでは、京都大学は、たしかにずいぶん理解がある。この点では、とても良い大学です。

こんななかではめずらしいことですが、他大学の公開授業を見に行ったこともあります。250

人くらいの授業ですが、とてもすばらしかった。授業の冒頭で、前回の授業の感想を書かせて、それから授業に入る。授業はとても上手いのですが、それでもお昼前の授業だったので、私が見ているのに、机の下に潜って早めの昼食を食べている学生が3~4人いました。それでも、ほぼ250人全員に近い学生たちが授業に参加している。そして最後にも、授業の感想を書かせて集めている。この二つの膨大な量の感想を、授業者が全部読んでいるとは、とても思われません。しかし彼は、「私は読んでる」と述べ、最後には「君達書いたものは、成績に響く」と脅かしをかけています。なかなかうまいものです。

これを見ることによって、私は、とても元気づけられました。こんな場合でも、こんな風に授業を組み立てられるのかという事実は、とても新鮮でした。私自身が力を得て、助けられました。どうしても連携をとることを考えないと駄目ですね。また、連携を考えれば、それでかなりのことができる。そんな感じもします。

#### ⑧ 結論的に

最後に、大学の授業改善ということで、あれこれ話してきましたが、そんなに高度なことが問題ではないのです。このことを強調しておきたいと思います。問題はとても単純なことなのです。

はじめに、私は、喋ることはできるが、聞くことができない、と言いました。これは私だけのことでしょうか。大学の教師は一般に、授業で自分がいったい何をやっているのか、同僚の誰かに見られたことも言われたこともない。教育実習など何も受けずに教壇に立っているので、聞く能力をチェックされたこともないし、喋る能力について点検してもらったこともない。だから、大学の教授法の改善で、一番初歩的で基本的な改善点は何かということ、自分が何をやっているのかについて、リフレクティブになることです。自分の授業のテープレコーダーを録って、自分で聞いてみることです。まずはこのあたりから、始めたらいいだろ

うと思います。もっと良いのは、うまく反射してくれる参観者がいて、かえしてくれることです。身近な参観者としては学生がいます。この学生たちの反応をうまく受け止めて、リフレクトできればとても良いのです。けれども、たとえば私のようにリフレクトの能力があまりない人には、これは難しいことです。

京都大学工学部が教員の教育意識調査をしましたが、このとき私も参加しました。その際、私がショックを受けたのは、自由記述欄で、「あなたは授業でどの様な工夫をしておられるか？」という問いに対して、実に多くの豊かな回答がありました。その内容を見ると、考えられる手だてはほとんど行われていることがわかります。ただ残念なことに、ある人がしている工夫は、他の誰にも伝達されていない。蓄積もされていない。大学の場合、授業の工夫をしていないわけではないのです。しかしそれは、残念ながら伝達も蓄積もされていない。どんなにつまらないことでも、ノウハウを蓄積することは大事です。私たちのセンターも、こういう伝達や蓄積のお手伝いをやっていくべきかとも思います。

ともあれ、授業改善にあたっては、基本的には、相手をアクティブにさせることこそが、もっとも基本的な技術です。インタラクションを心掛けるべきなのですが、そのためには、何とかして相手のありさまと自分のありさまが良く見えるような工夫をしていくべきでしょう。その工夫には、テーブルコーダーを使ったり、公開実験授業をしたり、いろんなレベルがあります。ともかくも、一つずつ実現していくことが大事です。

最後に、これは、皆さんに考えてもらいたいことがあります。ハーバード大学のデレクボクセンター（教授法のセンター）の所長が講演された時に、このセンターが相手にしているのは、1～2割のレベルの高い教師、1～2割の教育能力の無い教師以外の6～8割の人達だといわれました。そうだろうという気もしますが、少し引っかかります。ここで切り捨てられた教育能力の無い1～2割の教師のことを、どう考えられますか？

研究を一所懸命にやっている人は、教育も一所懸命にやっているというデータもあります。その人の保持しているパワーという面から見れば、当然です。しかし、大学教員には、教育能力の他にも、研究能力や組織経営能力や社会サービス能力も求められます。それぞれにいろんな能力をもった人たちが、多様に連携していくのが良いのかもしれない。一人が全部の能力を満遍なく持つべきだなどとは、考えるべきではないのかもしれないね。

しかし、今の高等教育の現状は、とてもそんなことをいう段階にはきていません。なにしろ私たちは、もっとも基本的なところ、つまり日常の教育システムの開発というところでは、ほとんどゼロに近いところにいます。だからで、そういうことはまだまだ言うべきでないのかもしれない。

ともあれ、時間が参りましたので、話はこれで終わります。